
ガチムチ探偵
恥辱の拘束
レイプ輪姦




俺の名は
弓削冬吾
ゆげとうご
私立探偵だ
自他共に認める
確かな能力
評判は上々
依頼は次から
次へと舞い込み
休む暇もない
俺は仕事を
選ばない
多少の優先度は
あるものの
基本的に何でも
引き受ける
人捜しから
凶悪事件まで
その内容は
多岐に渡る


……その日も
いつものように
依頼人が訪れた
浮気調査…
……ですか


はい
高名な探偵さんにこんなことを依頼するのは心苦しいのですが……
何せ主人は……
――ええ わかります
依頼人は震える声で縋るような目をして切々と訴えた


この女性の夫は
裏社会にも
顔が利く権力者
たかが浮気調査
といえど
手を出すには
リスクが高い
散々門前払いをくらい
藁にも縋る思いで
俺の元へ来たのだろう
その思い詰めた姿は
あまりに哀れだった
彼女は純粋に
夫を愛して
いるのだろう


わかりました
お引き受けしましょう
……ッ
よ、よろしいのですか…？
ご期待に添える結果になるかはわかりませんが
ああ…！
ありだとうございます


俺はさっそく
依頼人の夫
野田島の調査を
開始した
通常の浮気調査
よりも格段に
手を焼くだろうと
思っていたが
予想は
的中する


野田島の
乱交ぶりは
有名だった
男女問わず
節操なく
食い散らかし
拉致監禁
レイプ拷問
強制売春
おぞましい
犯罪行為も
多々あると聞く


お願いです！
俺はどうなっても構いません！
だが子供たちは…ッ
子供たちは見逃してやってください…ッ！
ああ……ッ
弟は…弟だけは許してあげてください…！
うーん
麗しい家族愛
その健気さでパパとお姉ちゃんには鬼バイブの激強振動にどこまで耐えられるか見せてもらおう♡
お父さん…お姉ちゃ…
……え？


んほおおっ!?
ブブブブブブブブブブブブ
オオオオッ!?
おッ
ボホッ
ビクンッ
ビクンッ
ビクンッ
ブルンッ
ブルンッ
ゴッ!?
ジュボッ
ゴッゴッ
おぶうっ




この依頼は
もしかすると
単純な浮気調査
では終わらず
凶悪な犯罪の
証拠を掴むことに
なるかもしれない
野田島がただの
下衆な浮気男と
いうだけなら
その処遇は
依頼人である
妻に委ねるが
許し難い
悪党であるなら
この俺がぶち
のめしてやる


調査開始から
二週間ーー
俺は野田島を
尾行していた
奴が違法な
店に出入りし
おぞましい
犯罪行為に加担
しているとの
情報を掴み
証拠を押さえ
被害者を救出する
つもりだった


だが――
すっ
何!?
ハッ
いつに間に…ッ
この動き
こいつら
プロ…ッ
プシュッ
ドン
ドサッ
カッ
しまっ…!
くす…
…り…
グラッ


……
……ああ
なるほど
うん
うん
根回しは
済んでるね？
はい
にしても
イイ獲物が
釣れたねぇ
…う…


優秀な探偵のようで……
正義感と腕っぷしに定評のある奴だとか
ほほぉ
いいねぇ
楽しめそうだ
……おや


気がついたようだね
!?


ギチッ
てめ…ッ
野田島ッ
ギチッ
クッ
くそッ
なんて頑丈な
拘束だ…ッ！
んふふ
ずっと僕を
調べてたね
せっかくだから
ゆっくりお喋り
したかったんだ
正義の
探偵くん♡


何の真似だッ
ん～～
君は忖度をしない男のようだからねぇ
僕はね君を傷つけたくはないんだよ
ふざけるなッ
ふざけてないよぉ
だって君放っておいたら僕のアレコレ暴く気でしょ？
当然だッ
俺はてめえらのようなクソ共を絶対に許さねえッ
ふふふ


いいよ
いいよぉ
くぅ…ッ
そういうの
大好きだから♡
こいつ……
俺をどうする
つもりだ……
君みたいな
屈強なガチムチを
『説得』するの
すっごく
楽しいもんねぇ


じゃ
さっそく
!?
ビリッ
あっ
ビリッ
ビリッ
邪魔な服は
取っちゃおうねぇ
やめッ
ビリッ
ビリッ
ビリッ
やめろ


わーお♡
～～～ッッッ
すっごい体
最高～♡
ぶるッッ
ぐっ
ズッ
クソッ
クソッ
この下衆がぁ
あああああッ!!
ボロン


コイツはいつもこうやって自分に都合の悪い人間を…ッ
許せねぇ…ッ！
プルンッ
……だが
暴力を振るう様子はない…
ヒクッ
ヒクッ
一体
俺に
何
を……


こ、コイツら
ガクガク
ガク
ガク
んふっ
ぐふふ♡
ガチガチ
まさか
あー…イイ
イイよぉ
ぐ
ぐ
ヒクッ
ヒク
まさか俺を——


えいっ♡
ぎゅむぅぅぅ
ぐにぐにぃぃ
ボボボ
ビヴ〜ッ
ガクガクガク
ビキビッ
ビキビッ
ガクガクガク


あーーーッ!?
なっ
何が…ッ!?
おぇッ
ゴッ
おっ
やめっ
アヒィィッ
こんなッ
嘘だッ
こんな
モロ感ッ
ぶしゃっ
ギチィッ
ビクッ
ドピュッ
アアアア


んほぉ
ボッ
おおお
ガク
アッ
ガク
ガク
アヒッ
はーっ
おッ
ガク
はーっ
そんな…ッ
あ
お
びくびく
ピュルルッ
びくびく
ガク
ビグッ
ビグッ
ガク


あ
アッ
ボッ
アヘッ
ガク
ガク
ガク
んふふ♡
すごい
反応～
これは
薬の力
だけじゃ
ないねぇ
んぐっ
は！
は！
この
感じっぷり
卑猥すぎる
ガチムチボディ
ビキッ
ビクンッ
ビクンッ
んおっ
オウッ
アーッ
ビクンッ
探偵よりも
肉便器が
天職だね♡
ビグッ
ビグッ
違うッ
そんなわけな


ンアアアッ!?
ちくしょうッ
ちくしょうッ
クソぉおおおッ
この俺が……ッ
こんなゲス共にッ
あひッ
アッ
ボッ
あああああ
乳首ッ
乳首ヤメろぉ
おおおおッッ
アヘアアアッ
ぐふッ♡
とんでもない
雄っぱいだねぇ
乳輪も乳首も
規格外の
大きさに感度
レイプ専用の
デカエロ
雄っぱいめ！


んおおおおッ
イクッ
胸でイクッ
おんッ
ボンッ
バインッ
ブルンッ
ほれほれ♡
あ!?
ぶるるッ
ビヴヴッ
ホーッ
ビルルルッ
ヒキッ
ぶるんッ
ビスッ


ビッ
イグッ
イっでるッ
またイグッ
そんな…
ぎゅむっ
ビギッ
ギチチッ
ビクッ
はやーい
まだちょっと
雄っぱい弄った
だけだよ？
今からこんな
雑魚っぷりで
大丈夫ぅ？
ビクッ
おひいいっ
ビュッ
ビュッ
俺…っ
胸でイ――


イグゥウウウッ
あーッ
ボーッ
ちっちっ
乳アクメエエエエッ
おおっ
おがあああッ


おっ
オヘッ
あ
ひぎっ
ヒッ
びぐうっ
びぐっ
ヒイッ
ひッ
すばらしい
汚アクメだねぇ
さすがは
生粋の
肉便器♡
ああああ
俺…俺……
ガク
ガク
ビクンッ
ビクンッ
ガク
ガク


こんな
イイ玩具
独り占めは
よくないね
あ
あ
ヒクッ
ア…ッ
ビク
ビクンッ
みんなで
楽しもう♡
ガク
ガク
ガク
ガク
よろしいの
ですか？
もちろん！
そんな…ッ
これ以上は…ッ
ドロォ…
もういつでも
犯せる便所な
わけだし
僕は
気が向いたら
使うから
君たち好きに
遊びなさい♡
ありがとう
ございます！


ヤッ!?
ビュルッ
H
チンッ
ポッッ!?


おほおおおッ
ビクンッ
おっ
ビクンッ
オウッ
ビクンッ
ははっ！
野田島様の
言う通り
最高の便器だ
チンポッ
ズコ ズコ ズコ ズコ
ボアアッ
ズボッ ドチュンッ
チンポレイプッ
未使用処女穴
なのに即イキ!?
ゴム無し
生チンポに
イかされる…！
俺のケツ穴
マンコになって…!?


このデカ乳
とんでも
ねえなぁ
おぐっ
ギッ
ンほおおお
ボッ
くぅう！
指が沈む
マンコ
やっべぇ
アヘッ
ドチュッ
おっ
このドスケベ
淫肉ダルマが！
バチュッ
ボッ


あーーーッ！
やべぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッッ
もうやめッ
オヒィイイッ
オッ
イグゥウウウウッ
おオゴッ
あッ
ドゴッ
ドゴッ
ドゴッ


グヒィィィィッ
ホゴッ
何してもイクじゃねえか
この猥褻汚物め！
マガガッ
イヤァアアアッ
もうやべでええええええッッ
おっ
ボーッ
ドコッ
なーにが正義の探偵だよ
チン負けしまくりのドスケベ雑魚マンがよぉ


ほぉおおんッ
おうッ
ビッ
ビッ
ガクガクガク
ビクン
ヒィッ
イヤ
ッッうううぶう
ブピュュュュッ


んおっ
オッ
ぐぃぃぃ
無理ッ
ムリィイイイッ
チクビィイイッ
マンコォオオッ
限界
超えでるッ
ボボッ
ぷぎゅうッ
ドプッ
おっ
こんなッ
こんなの
イヤァアアアッッ
デーーーーッ
ボゴォボボル
もうやべでぇえ
えええええッッ


やべでッ
許じでッ
もうらめッ
マンコだめッ
チンポ
いやぁあああッ
ビクッ
ビクッ
ズッ
ズッ
ズ


ガク
ガク
ガク
ビクッ
ビクッ
ビクッ


んおおおおおおおおッッ
終わらなひッ
無限レイプ
輪姦んんッ
ビクッ
ビクビク
ガクガク
アヘアヘ
ビクッ
パンッ
パンパンッ
グリグリ
ぐぐぐ
ビクッビクッ
ビクッ
パンッ
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ


ボッ
ビグッ
ボッ
ビグッ
ふごぉッ
ぐひぃぃぃッ
ビグッ
ハハハ！
こりゃもう
探偵どころか
男ですら
ねえなぁ
ククッ
人間か
どうかも
怪しいぜ
マンコ豚に
なるべくして
なったってか
ボボボ
おーっ
おづぉオオッ
ビグッ
ビギィッ
ドチュ
ドドド


ガク
ビン
ビン
ヒギッ
ガクガクガク
ガク
あっ
ガク
ピュッ
ビュッ
ゴポォ。
おうオッ
ガクガクガク
ンギィイッ
ホォンッ
オッッ


もう拘束いらねぇな
外して色んな体位試そうぜ
玩具もたくさんあるから使ってね♡
さすが野田島様！
ボッ
おぉ
アヒィッ
ボボッ
ビクンッ
ビュルッ
ビクンッ
イヤぁ…ッ
おボッ
はーっ
はーっ
んほぉっ
もうやめ…て…


オラッ
ケツ上げろ！
ブピュウウウ
ドクドク
ぶるんっ
ビグウッ
んはぁあああッ
は？
アッ
ボッ
あーっ
もっ
ヤメッ
頼むッッ
ビ
ビクッ
ビギッ
ああああああ
何か頼むなら
相応の言葉遣いって
もんがあるだろうが


もうやべでぐださいッ
許じでッ
あ〜っ
雑魚マンドスケベ豚が調子に乗ってずびばぜんでぢだぁあッ
ドチュッ
ドチュッ
これ以上レイプしなひでくださひぃいいいッッ
ヒーッ
おおんっ
オッ
雄っぱいもッ
汚マンコもッ
おチンポ様に負けまじだッ
ガチガチ
ン肉便器ッ
ホオンッ
俺ッ
おぉオッ
身の程知らずの
チン媚びメス豚肉便器いいいいッ


おー
よく
わかってる
じゃねえか
おほおっ
ヒッ
ア
んあへっ
オッ
やっと便所の
自覚を持てたな
イイことだ
素直な便器は
大事に大事に
長く使って
やるからな♡
ブピュピュピュ
ガクーン
ガク
ガク
ガク
ガク
しかしこんな
屈強なガチムチが
無様に泣き喚いて
必死に懇願するとは
可哀想だし
この辺に
しといてやるか
ッッ!?
そうだな
あ
あ
あ…ッ
ありがとう
ございま




ぱんっ
ぱんっ
ドチュ
ドチュッ
ドチュッ
勘弁するわけねーだろ！クソ豚ぁッ！
ンホォォォォォ
ガリガリ
きゅいっ
グイィッ
ビュルッ
ビグッ
ビグッ
ビグビグビグッ


ドヂュッ
ドヂュ
誇りも尊厳も
何もかも捨てて
懇願したのにッ
そんなッ
ギッ
ちんぽっ
ドッ
ぐいいいっ
ぐいっ
ビクッ
惨めすぎるッ
こんな無様で
汚い姿…ッ
ひっ
ギチィィッ
グヒィィッ
ビクッ
もう
本当に
俺…ッ
酷いいいいッ
猥褻汚物の
肉便器に…ッ


うぶうッ
ドヴュッ
ドッドッドッドッ
オッッ
グリッ
ギュルッ
ぐりゅんっ
ゴッ!!
ブロロロ


玩具もチンポもたっぷりあるからなぁ♡
しっかし馬鹿だねぇ便器の懇願に効果あるわけねーだろ
ズッ
マンコにチンポッ
マンコオオオッ
おおんっ
チクっ
マンっ
チンポ
んほーっっ
乳首ィッ
ヂグビ千切れるッ
ずっと汚チンポズッポズッポおおおおおおおおッッ!?
ビッ
ビッ
ぶるるんっ
あああああっ


おひぃぃぃ


オラッ！
二本挿しィッ
ドゴッ
うわっ
ウケる
余裕じゃ
ねーか
あーッッ
ボッ
ビグヴッ
乳首っつーか
雄っぱい全体が
ヤベェ♡
爆乳も巨尻も
エグいこと
なってんなぁ
チンポォォォッ
ダブルチンポォ
オオオオッッ!?
ズッ
おおッ
オゴッ


ガク
ガク
ガク
ガク
ぶほぉぉぉ!!
あ~!!
ぢゅうう
ビクビク
ビクビク
ツツ
グイッ


オッ
ぎっ
あがッ
ンホッ
アヘォ
ヒギアアアアアッッッ
もう
化け物級の
エログロ
淫肉だな
生き恥じ♡
汚物にも
程がある
便器が
穴サボんな
オラ！
口開けろッ
ぐぶぅう
ううッッッ


アヘッ
ドゴュロロロ
ブボッ
ぶっぽぉッ
ぐぼっ
オホヒイイッ
ブルンッ
ブルッ
んのっほおおおおッ
だめッ
ダメッ
だめぇえええええッッ
ボッ


おッ
オッ
ゔッッ
おお…
おっっ
堕ち…ッッ


ヒヴヴヴ
ッッッッッッッ


オンッ
おほぉッ
おうオッ
オッッ
堕ちた♥
オッ
オッッ


おオッ
ッッ
オッッ
ッ
ストレッ


ぐぐぐぐ
ドロドロ
ヌチャ


ブピュッ
オヴッ
オッッ
おおんッ
おほっ
肉便器ちゃん♡
これから末永くよろしくね
お～～～～
ホオンッ
ぐひッ


ゴ
ゴ
ゴ


誰…か…
助…け……



その日、弓削探偵事務所に舞い込んだ依頼は、ごくありふれたものだった。

「浮気調査……ですか」

「ええ」

依頼人は冬吾と同世代の、品のいい女性だった。薄化粧の顔に戸惑いと悲しみの表情を浮かべ、シルクのハンカチを握り締めている。

「高名な探偵さんに依頼するのは心苦しいのですが、何せ主人は……」

「いえ、わかります。どこの探偵社もお手上げだったんでしょう？」

「……はい」

女性から渡された彼女の夫の資料に目を通し、冬吾は理解を示した。

依頼人の夫、野田島の噂は冬吾の耳にも届いていた。大企業の幹部。権力もコネも金もあり、かなり悪どい男だとか。あらゆる情報に精通する冬吾と

はいえ、一介のビジネスマンの名がここまで届くとは、かなりの食わせ者に違いない。

もちろん、男の妻にそのことを告げたりはしないが。

（黒い噂の絶えない男だ。浮気なんぞ、息をするようにしてるだろうに……この奥さんは旦那の本性をどこまで知ってるのかねぇ）

添付された写真の、好色そうな太った中年男を眺めつつ、冬吾は胸中で嘆息した。

「わかりました。お引き受けしましょう」

「……!?　よろしいのですか？」

幸い、今追っている事件はない。それに冬吾は依頼を選り好みしない主義だ。

「奥様のご期待に添えるかどうかはわかりませんが」

「ああ、ありがとうございます！」

女性は離婚の慰謝料を釣り上げるために証拠を欲しているわけではなく、むしろ男が潔白であると証明したいのだろう。たとえどれほど疑わしくとも。そんな健気さを哀れに思いつつ、冬吾は調査着手を決めた。

野田島の浮気調査を開始し、冬吾は迅速に男の情報を集めた。

たっぷりと贅肉がついた、お世辞にも見目がいいとは言えない中年男。滲み出るいやらしさはさもありなん。これまでの性愛遍歴は乱れに乱れていた。

妻には隠しているようだが、野田島はバイらしく男も女も節操なく手を出しては食い散らかしている。中には犯罪行為らしきものもあり、冬吾の怒りが膨れ上がる。

調査開始から一週間ほど経った頃。

平日の夜、冬吾は野田島を尾行していた。違法な店に出入りしているとの情報を掴み、証拠を押さえるつもりだった。

依頼はあくまで浮気調査だが、犯罪行為を野放しにするつもりはなく、あの薄幸そうな妻にも離婚を勧める気でいた。

普段と変わらぬ探偵仕事。迅速かつ敏腕、相手が誰であろうと最後には必ず悪を挫く。そのはずだった。

暗く深い泥沼から、ゆっくりと浮上するような不快な目覚め。

「……う……っ」

「気がついたかい？」

「!?」

覚醒した冬吾は、すぐさま状況把握に努める。

（ここは……）

広い部屋だ、ホテルのスイートだろうか。寝かされているベッドも、巨漢の冬吾にさえ充分な大きさだった。

記憶は、対象を尾行して、店の扉近くに身をひそめていたところで途切れている。

（くそ……ッ、不甲斐ねぇ）

どうやら背後から強襲されたらしい。

あれから、そう長い時間は経っていないはず。体内時計の感覚には自信があった。

そして今現在、目の前には。

「妻が世話をかけたね」

「……っ、てめえ……」

反射的に腕を振り上げようとして、その時初めて四肢を拘束されているこ

とに気づいた。
頑丈なベルトだ。力自慢の冬吾でも、まず外せない。
（……冷静になれ。相手の隙を誘うんだ）
己に言い聞かせ、何とか怒りを鎮めて平静を装う。
「……随分と手荒い手段に出たな。野田島さんよ」
「ふふ、すまないねぇ。だがこうでもしないと、落ち着いて話せないと思ったんでね。弓削冬吾くん？」
「いつから俺に気づいてた？」
「最初からさ」
野田島はグフグフと嫌悪を誘う笑い声を発し、ベッドに腰掛けた肥満体を揺する。
「自分で言うのもなんだが、僕は立場ある人間だからね。足元を掬おうとする敵は多い」

「……」

「大手の探偵社なんかは掌握済みだが、君のような個人までは手が回らない。だから、常に身辺を張らせているのさ。保身には余念がなくてねぇ」

（クソったれ……ッ）

冬吾は己の失態に苛立ち、精悍な顔に青筋を立てた。

「弓削くん、君は随分優秀な探偵のようだねぇ。評判はもちろん、僕の部下も幾度となく撒かれたようだ。こちらの動きに感づかれやしないかとヒヤヒヤしたよ」

「……こんな真似をして、どういうつもりだ？」

「君を懐柔するのは不可能だと思ったからね。強硬手段に出ることにした。もちろん、できる限り穏便に済ませたいけれど」

「ふん、無駄だ。俺の口を封じたけりゃ、殺すしかねえ」

「はは！　とんでもない。人殺しなんてしないよ」

「なら廃人にでもするか？　加減が難しいぞ」
「やれやれ。どうしてそう物騒なことばかり言うのかな」
野田島はわざとらしい溜め息をつき、冬吾の顔を間近で覗き込む。
「僕はね、暴力が大嫌いなんだ。だから……」
「ッ!?」
いつの間にか、野田島の手には注射器と薬瓶が握られていた。
冬吾に焦りが募る。これまで数多の修羅場をくぐり抜け、ある程度の薬物耐性があるとはいえ、完璧ではない。心身が屈強であっても、それはあくまで人間の範疇だ。
野田島は警戒を剥き出しにする冬吾に対し、いやらしく笑いかける。
「大丈夫、意識に影響はないよ。肉体に少し作用するだけのシロモノだ」
「……ッ」
（くっ……うう……ッ）

大量の薬が首筋から注入される。冬吾の全身を巡る謎の液体。

さらに野田島がサイドボードから取り出したナイフで、服を切り裂かれてしまった。

露わになるガチムチ巨体。大きく膨れた胸に尻、太く逞しい腕に足。見る者を感嘆させる、鍛え上げられた肉体だ。

野田島も例外ではなく、涎を垂らさんばかりに興奮し、無遠慮に冬吾の全身を撫で回した。

「この魅力的な体を恨むんだねぇ。こんなドスケベボディでなきゃ、別の手段も考えただろうに」

「……んくぅっ！」

「ふふ、感じやすいんだね」

「だま、れ……オウッ！」

冬吾の意思に反し、情けない声が洩れてしまう。全身が過敏になっていた。

這い回る指の感触に巨体が身震いする。

「うーむ。素晴らしく高能な薬の影響もあるだろうけど、君の素養も大きい。こんな卑猥な体だ。これまで色々とあったんじゃないのかい？」

「黙れッッ!!」

決して触れられたくない傷が、冬吾にはあった。冷静さをかなぐり捨てて叫んだものの、すぐさま己の悪手に呻く。

「おっふ。くくく、その反応……図星かぁ」

「てめえッ！　ぶっ殺してや……」

「えい！」

むぎゅううっ♡

「ヒギィイイッ!?」

豊満な胸、爆乳と呼ぶべきそれを力任せに掴まれ、うわずった声をあげてしまう。

野田島は目を細め、両手をせわしなく動かした。
「素直になったら、思い出話も聞かせておくれ。ンフフ、楽しみだなぁ」
「んぐぉおおっ！」
「くふっ、すごいデカ乳。揉み甲斐があるなぁ。それっ！」
「はぎゅっ!?」
「ほれ！」
「くふぅううんっ!?」
「ほらほらほらぁ！」
「あむぉっ!?」
「そりゃあ！」
「オゥウウウウッ!?」
両胸が大きくたわみ、揺れ、冬吾は敏感になった肉体に翻弄される。
そして、ついに。

グニィイイッ♡

「ォッ!?♡」

ビクン、と巨体がのけぞる。声に明らかな快感が滲み、そのことに冬吾自身が驚愕した。

「あ……っ、アアアアッ♡」

（そ、んな……!?）

「うんうん。いい感じに温まってきたねぇ」

「て、め……こんな、クゥッ♡　ふざけた真似……ンンッ♡　絶対に許さねえ……ッ！」

「いつまで言ってられるか、んふふ、見ものだね」

「殺す！　殺してや……ンヒィイイイッ!?♡」

怒声が嬌声に変わる。

爆乳の先端、乳輪から乳頭に至るまでを握り込まれていた。野田島の太っ

た指が卑猥にうごめく。

「こんな乳首して……裸はもちろん、薄着も無理だろう？　猥褻行為で逮捕されてしまう」

「やめッ、くひぃいいぃぃっ!?♡」

「乳輪も乳頭も大きくてプックリしてる。もっと育ててあげようねぇ」

むぎゅっ♡　コリッ♡　くりくりくりくり♡

「アヒィイイインッ!?♡♡♡」

（ああっ!?　胸がッ、乳首がぁあああッ!?）

元から異様に大きく、人目に晒せなかった冬吾の乳輪と乳首だ。薬によって感度まで大きく膨れ上がったそこを、太い指が器用に嬲る。

輪郭をなぞるように撫でたと思えば爪を立てられ、押し込まれたと思えば牽引され。

「あああああっ!?　やめろ！　やめっ、グヒィイイッ!?♡　おぁおおおおっ

♡♡♡　ヤメロぉおおおおっ！」

「ふふふ、いいよいいよぉ」

ギチィイイイッ♡

「むぉおおおおんっ!?♡♡♡」

ねじりながら強く引き上げられ、冬吾の悲鳴が大きくなった。

（こん、な……こんな馬鹿なことが……ッ！　くそぉおおおおっ！）

「ヒイッヒイッ!?　あああああんっ♡♡♡」

激淫だった。全身を快楽電流が走り抜け、ビクビクと滑稽なまでに震えてしまう。

「胸ぇっ、俺の胸がぁあああああっ！　ヒギィイイイッ!?♡♡♡」

「ノンノン、コレは雄っぱいだよ。立派で卑猥な爆乳雄っぱい」

「デヒィイイイイジッ!?♡♡♡」

（違っ、おっぱいなんかじゃ……アアアアアッ!?）

「おっぱい、おっぱい、馬鹿で大きなエロおっぱい」

むぎゅ♡　もぎゅ♡　グニ♡　グニ♡　グニィイイッ♡

「んぉおおおおっ!?♡♡♡　おっおっ雄っぱいぃいいいいいんっ！」

ハードボイルドの鑑のような強面男の口から、情けなく卑猥な言葉が溢れた。

「クホォオオオオッ!?♡♡♡　おおっ♡　ォッ♡　おおおおっ♡♡♡」

（声が止まらなっ……おっ♡　クヒィイイイイッ!?♡♡♡）

「ほーれ、コリコリィ！　んじゅちゅうううっ！」

「んぁあああおおおっ!?♡　やめろぉおおおっ！　雄っぱいもうヤメッ、アギィイイイイグイグイッ!?♡♡♡」

汚らしい口での強力吸引、舌先での高速ビンタ、そして歯を立てられるという、敏感乳首にはむごすぎる仕打ち。左右平等にいたぶられ、冬吾のまなじりに涙が滲む。

チュブゥウウッ♡　カリッ♡　チュギィイイッ♡

「ひぐぅうううっ♡♡♡　ンオォオオオゴゴゴッ♡♡♡♡」

（こんなっ、こんなクズ野郎にいいようにされてッ、アヒァアアアッ!?♡♡♡　クソォォッ！　ちくしょぉおおおおっ!!　ンギィッ!?♡♡♡）

「さ、そろそろイこうか。一度達すると連続イキしてしまうだろうから加減してたけど……うん、君は丈夫そうだから問題ないね」

ぐに♡　ゴリュゥウウウッ♡♡♡

「んほぉおおおぉおおおおおおおっ!?♡♡♡♡♡」

乳辱が激しさを増した。

冬吾は快感も己の惨めさも、すべてを拒絶するように顔を激しく振りたくるが、知らず知らず尻や胸も大きく揺れて、無様さが極まっていく。

ニギチィイイッ♡　ブルンッブルンッ♡　ぐりぃいいいっ♡♡♡

「ヒィイイイッ!?　あっあああぁぁぁぁぁぁぁっ!?♡♡♡♡♡」

（駄目だ駄目だッ!!　それだけはぁあああぁぁぁぁッッ!?）

「いけぇえ！」

ギュムグリィイイイイッッ♡♡♡

「ッッ!?♡♡♡　イッッグゥウゥウウウウウヴヴヴヴッ!!♡♡♡♡♡」

ビクビクッッ！　ビクンッ！　ガクッガクッ！

「あ……あぁあああああ……っ!?♡　ォッ、ひっ♡」

（あああああ……そんな……胸で……乳首でイって……この俺が……ッ！）

「うんうん、素晴らしい」

野田島がようやく胸から手を離すも、事態は悪化の一途を辿る。

「こっちも、きっと期待を軽く超えてくるんだろうね」

むちぃいいいっ♡

「んひぃいいいいっ!?♡」

次に狙われたのは、胸に負けず劣らず大きな尻。

野田島は拘束具をいじって冬吾の足を大きく開かせ、腰を浮かせた。そのせいで尻穴が露出し、次なる被虐の予感にガチムチ探偵は恐怖する。

「やめろッ！　俺の尻にさわるなッ！」

「心配しないで。君が眠っている間に、ちゃーんと綺麗にしておいたから」

「やめろッ！　さわるなッ！　離れろぉおッッ！　これ以上、俺に……」

巨体が激しく暴れるが、拘束もベッドも頑強で、とても逃げられない。

やがて。

ズブゥウウウッ♡

「んほぉおおおおおおおっ!?♡♡♡」

尻穴に太い指が深々と埋まる。

「おお！　やはり素晴らしい！」

潤滑剤をまとっているとはいえ、挿入はあまりにたやすく成されてしまった。

野田島は歓喜の声をあげ、ゴリゴリと中をえぐりつつ、ズコズコと激しく指を抜き差しする。

「この柔らかさ、締めつけ、感触！」

にちゅにちゅ♡　ズルゥウウッ♡　コリコリコリッ♡

「ヒギィイイイッ!?♡　んおっんおっ！　ぐほぉおおおおおっ!?♡♡♡」

（尻ぃいいいっ!?　尻にクソ野郎の指ぃっ!?）

「何を取っても完璧な穴だよ、弓削くん！」

「あひァアアアアアデデデデジッ!?♡♡♡」

（おおおおっ!!　ケツ穴おかしくなってるぅうううううッ!?　イヤァアアッ！　こんなの嫌だぁあああおおおおッ!!）

強烈な手淫に、ついに冬吾は泣いた。一度決壊した涙腺は止めどなく、壊れたように滂沱の涙を流した。

ズチュッ♡　ごりっ♡　ちゅここここっ♡

「ひぐおぉおおおっ♡♡♡　ヒィイイイッ!?　やめっ、ケツ穴えぐるなぁあああああっ！　ンボォッ!?♡♡♡」

「コレはもう尻じゃないよ。こんな欲しがり淫穴、マンコに決まってるじゃないか！」

「おひぃいいいいぃぃぃいぃんっ!?♡♡♡」

（違ぁあああああっ！　違う違うッ！　俺のケツ穴マンコなんかじゃッ……んほぉおおおんっ!?♡♡♡）

気づけば凌辱の指が増え、粘膜をこそげ取られるような苛烈さで嬲られ、前立腺は強烈殴打にいたぶられる。

グリュンッ♡　ずぬぅっ♡　ゴリゴリゴリゴリッ♡

「んぐぉおぉおおオオオオッ!?♡♡♡　ヤメッ、指ひぃいいいいぃぃぃぃぃっ♡♡♡」

「何本でもいけるねぇ。それに丈夫！　これはハードレイプに適したドスケ

べ雑魚マンコだ！」

「ヒギュァアアアアンッ!?♡　のほぉおおおおおっ♡♡♡」

（やめろぉおおおおッ!!　オッ♡　指ズコやめぇえぇぇぇぇッ！　ンギィイイイッ!?♡♡♡）

ポルノ顔負けの指マンレイプに、冬吾は絶叫し続けた。過ぎた快感が酷い。恥辱と絶望に心まで犯される。

「この柔軟性なら、どれだけ犯されてもガバマンにならずにすむよぉ。よかったねぇ」

「ひぉおおおおおっ!?♡♡♡　ケツッッ、ケツ穴ぁあぁぁぁぁぁっ♡♡♡」

「だからぁ、ここはマンコだと言ってるだろぉ？」

ゴリュゥウウウウッ♡♡♡

「ヒッギィイイイイイッ!?♡♡♡　あぁぁぁぁっ！　まんこマンコッ！　ケツマンコぉおおおぉおおおおおおおおおっ!?♡♡♡」

目を背けたくなるような悲惨さ、卑猥さ、そして恥ずかしさ。最強を誇った巨漢の名探偵が、為すすべなく淫語と淫汁と醜態を撒き散らせながら泣き叫ぶ。

「あああああっ!?　イグッイグッ♡　下衆なブサ男の手マンでイックゥウウウウウウウウッ!?♡♡♡♡♡」

（クズ豚の暴力手マンでイクなんでぇえぇえぇえッ！　嫌だぁあああッ!!　こんなの俺じゃない！　俺の体じゃなっ……ほひぃいいいいいっっ!?♡♡♡　アクメ止まらなひぃいいいいッ!?）

「ふふ、イキ癖ついちゃったねぇ」

ジュブチュウウウッ♡♡♡

「のぉおおおおおおっ!?♡♡♡　ジァアアアアアアアッ!?♡♡♡」

「何度でもイクといいよぉ」

ズコズコズコズコッ♡♡♡

「んおっひぃいいぃぃいいぃぃいいんッ!!♡♡♡♡♡」

（いやぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁッ!?）

絶頂に次ぐ絶頂。

冬吾が手淫から解放されたのは、尻穴がもはや排泄器官を辞してモロ感性器でしかなくなり、淫猥な縦割れアナルになった頃だった。

「ふぅ……さて、さすがに辛抱たまらなくなってきたよ」

ビクンッ♡　ビクンッ♡

「あああぁ……っ♡　ヒグッ♡　ォッ♡　ぉおおん……っ♡　おっ♡　ォッ♡」

涙や涎をダラダラと流して激しく呼吸する冬吾。もはやまともな言葉を発するのも難しい。

（嘘だ……うそ……こんな……無敵の名探偵の俺が……こんな無様な……あっあっ）

そんなガチムチの痙攣する淫肉にのし掛かり、野田島が醜い豚のような顔面を喜色と興奮に染め上げる。

「さあ！　一緒に気持ちよくなろう……ねぇ！」

ドブヂュンッッ!!♡♡♡

「〜〜〜ッッ!?　オッッッ!?♡♡♡♡♡♡」

（チンッッポッッッ!?）

衝撃。快感の暴力的打撃。

アナルにペニスを突き込まれた冬吾の目がグリンと大きく回転して、精悍さ皆無の無様な白目顔になる。

悪を倒すことが信条のガチムチ探偵にとって、死よりもつらいレイプ凌辱が始まる。

「ほほぉう！　コレは……なかなか！」

パンッパンッ♡　ドチュドチュッ♡　ずろぉおおおッ♡

「んぎひぃいいいぃぃぃぃぃぃっ!?♡♡♡」

（クソ野郎の生チンポォオオオオッ!?　イヤーーーーッッ!!）

「僕のモノを最初から全部飲み込むなんてっ、すごいよ弓削くん！」

「ホォオオオオジッ♡　おおっ!?♡♡♡　オッオッオッオッ!!♡♡♡」

（チンポ大きすぎるぅうううっ！　チンポ激しッ、チンポレイプいやぁあああああッッ!!）

太った体に似合わず、野田島の動きは激しく巧みだった。高速ピストンはもちろんのこと、粘膜も奥も、冬吾の弱点を素早く見つけては徹底的に嬲り犯す。

ドゴッ♡　バッチュンッ♡　ズコズコズコズコッ♡

「ぐひぃいいぃぃっ!?♡　やめっ、抜けぇえぇぇぇぇっ!!　チンポ抜っ、ムォオオオオオジッッ!?♡♡♡♡」

軽蔑と嫌悪しか感じない男のペニスを突き込まれ、苦痛ではなく快感に泣

き叫び、もはや人間にあらずと見なされるような無様を晒す絶望。

冬吾の心は千々に引き裂かれ、汚濁に沈められていく。

「ヒィイイイッ!?　やべろぉおおおおおおっ!!　ヒグゥウヴヴヴッ!?♡♡♡んほほぉおおおおおおっ♡♡♡♡♡」

（クズチンポに負けるッ！　汚チンポレイプに屈するッ！　イヤだイヤだッ!!　下衆のチンポになんて負けたくなッ……アヒィイイイインッ!?♡♡♡）

「んんー、最高級の肉壺だ！　誇りなよぉ！」

ゴリュゥウウッ♡　ずぼっ♡　ドチュチュチュチュッ♡

「アヒッ♡　オヒッ!?♡　ぐひぃいいいいいいんっ♡♡♡♡♡」

激しく犯される淫肉。爆乳も、フル勃起巨乳首も、ムダ撃ち巨根も、超肉厚巨尻も、残像を見せるほどに上下左右にせわしなく揺れ、卑猥で滑稽なアクメダンスを踊る。

「えぐぁあああおおおおおっ!?♡♡♡　チンポぉおおおおおっ♡♡♡　マンコ

にチンポらめぇえええぞぞぞぞっ!!♡♡♡♡♡」

白目を剥いて舌を突き出し、様々な汁で汚れた顔面には、名探偵やハードボイルドの面影はない。アヘオホと聞くに絶えない声と淫語を叫びながら、冬吾は何度もアクメする。

そしてその哀れさと無様さを、おぞましい鬼畜男に笑われた。

「んふっグフッ！　たまらないねぇ！　ムチムチぷりぷり！　ドスケベデカ尻っ、最高だよぉ！」

ドチュゥウウンッ♡♡♡　ゴリッグリッ♡　パンッパンッパンッ♡

「ひぃいいいいいいいっ!?♡♡♡　れっれっレイプぅうううっ！　最低クソ犯罪者にレイプされてイクゥウウウウウウウウンッ!!♡♡♡♡」

（いやあああああッ！　イヤーーーーッッ!!）

号泣だった。体で泣き心で泣き、ガチムチ探偵の慟哭と絶叫がこだまする。

「んごぉおおおおおおっ!?♡♡♡　おっ♡　おっ♡　おっ♡　おっ♡　ア

ヒァアアアアッ!?♡♡♡♡♡　イグイグイッグぅうううううううづづづづんっっ!!♡♡♡♡♡♡」

「くぅうう！　搾り取られる！」

グジュウウウッ♡　ドピューーーーッッ♡♡♡

「はぎゅぅうううううっ!?♡♡♡　ムォオオオオオオンッ♡♡♡♡♡　おおっオッッッ!?♡♡♡♡♡♡」

（汚チンポザーメンンンンンンッ!?　クズの汚ねえザー汁マンコ注入ぅううううううううッッ!?　ンホォオオオオオオッ!!♡♡♡）

アナルからは野田島の精液が大量に溢れ、ピストンのたびに泡立った。薬と凌辱によって、冬吾の肉体はザーメンを激烈媚薬と捉えて反応し、汚く激しくイキ狂う。

凌辱者野田島もまた、狂気に飲まれていた。冬吾の淫肉にドハマリし、超人的な動きを見せる。

「これでも体力には自信があるんだ！　抜かずに五発……いや、この素晴らしい肉便器なら十発でも！」

バッチュ♡　バッチュッ♡　ずろろろッ♡　ドプンッ♡

「アヒィイイイイイイジッ!?♡♡♡　ザー汁どぴゅどぴゅぅううんっ!?♡♡　マンコぐちょぐちょっ！♡♡♡　アッッヘェエエエエエエエエッ!!♡♡♡♡♡」

（イグイグイグイグッ！　連続アクメぇえぇぇぇぇぇぇッ!!　ヒーーーーッッ!?♡♡♡）

冬吾の太く逞しい足が、感電したかのように激しく痙攣していた。

「ぐふふふ、たまらんねぇ！」

取っ手のように掴まれこねくり回される両の胸。汚辱ペニスに支配されたアナルは、屈辱の収縮奉仕に精を出す。

かすかな刺激にさえ絶頂する全身だ。より敏感な爆乳と巨尻は悲惨なこと

になっていた。

「ンゴッンゴッ♡　ジッゴ～～～ッッ♡♡♡　ぐひぁあぁおぁおぁっ!?♡♡♡♡♡　チンポピストン容赦なひぃいいいぃぃぃぃぃぃっ!?♡♡♡　ケツマンコ壊れるぅうううづづづづっっ!!♡♡♡♡♡」

憎悪する男にレイプされ、抵抗も出来ず泣き喚きながら絶頂する地獄。冬吾はそのガチムチボディを貪り喰われ、無様にアクメし続ける。

「んっっほぉおおおおおおおおおおっ!!♡♡♡♡♡」

（もうやめでぇえええええええッッ!!）

数時間後。

「……ふぅ。柄にもなく激しく盛ってしまった」

「おおおおお……っ♡　ヒグッ♡　オッ♡　お……っ♡　アヒッ♡」

ビグンッ♡　ビクビクッ♡　ビグンッ♡　ビグンッ♡

（おっ……マン、コ……アヒッ……チン、ポォ……ッ）

野田島の体力は驚異的だった。三日三晩、マフィアとの戦闘を繰り広げた一人で勝利した冬吾を、完膚なきまでに打ちのめすほど。

いつの間にか拘束具は外されていたが、指先一つまともに動かせないガチムチ探偵。仰向けに倒れ潰れた蛙を思わせる体勢で、淫汁まみれの巨体がビクビクと痙攣している。

「だいぶ仲良くなれたと思うんだが、どうかな？」

「んぎゅっ♡　お……オオッ♡　ほぉっ♡　おっ、あ……あああぁぁぁぁぁ……っ♡」

（も、駄目……もう、嫌だ……こんな……地獄、は……もう……ッ）

意識はかろうじて繋ぎ止めているものの、まともに喋ることが出来ない。情けない声を発しながら、凌辱者に涙に濡れた怨嗟の目を向けるのみ。

「うん、でもまだまだ頑張らないとね。君ほどの凄腕探偵に、手加減なんて

失礼だ」

野田島はそう言うと、扉に向かって大きく呼びかけた。

「入っておいで」

すると。

「失礼します」

「……ッッ!?」

突然現れた、大柄で屈強な男たち。野田島の部下のようだ。その立ち振る舞いを見るに、警護や荒事を担当していると察せられる。

男たちは下品な笑みを浮かべながら、ベッドに沈む冬吾を囲った。

「彼らにも手伝ってもらうよ。全員、優れたレイパーだから、安心して醜態痴態を晒してくれ」

「あ……あああああぁぁぁぁぁぁぁ……ッッ」

野田島がベッドを降り、酒を片手に近くの椅子に腰掛けたことが、輪姦の

合図となった。

ズボォオオオッ♡♡♡　パンッパンッ♡　ドチュドチュッ♡　ギチィイイッ♡

「ぐぶっぎゅぉオオオ

グニィイイイッ♡

「アヒあぁあああぁぁぁぁぁんッッ♡♡♡♡♡」

「恥ずかしい乳首め！　仕置きしてやる！」

グリコリッ♡　にぎゅにぎゅッ♡　ギュチィイイイッ♡♡♡

「ヒーーッ!?　ヂグビらめぇえぇえぇえぇッ♡♡♡　ンホッ♡　オホッ♡　おっおっおっおっ♡♡♡　連続深イキ乳アクメェエエエエエエエエエッ!?♡♡♡♡♡」

四方から伸びる手に爆乳はひしゃげ、巨乳首は弾かれ、こすられ、ねじり牽引された。

「しかし、とんでもないマンコ野郎がいたもんだ！」

「このケツ、どうなってるんだ？　いくらでも拡張できそうな……無限にチンコを飲み込みそうじゃないか！」

「そのくせ緩まず締めつけて……くっ、このバキュームケツマンコめ！」

パンッパンッ♡　ドッヂュンッ♡　ばっちぃいいいんッ♡　ズボズボズボォオオオッ♡♡♡

「あ〜〜〜ッッ!?♡♡♡　俺のケツぅうううっ♡♡♡　ゲヂュマジゴォオオオオオオッ!!♡♡♡♡♡　マンコになってるっ♡　マンコまんこマンコッ♡　ちんぽウェルカムフリーの公衆便所汚マンコになってるぅうううううづづづんっ!?♡♡♡♡♡♡」

巨尻を強烈スパンキングされながら、巨大なレイプペニスを絶えず突き込まれ、大量のザーメンを注ぎ込まれて粘膜に塗りたくられる。

全身を穢され、いたぶられる激淫。とうに限界を超えていた。

「ノホォオオオオオオッ!?♡♡♡♡♡　おっおっ♡♡♡　ヒ〜〜ッ!?♡アアアアもうやべでぇえええぇぇぇぇぇっ！　イヤァアアアアアアアアアアッッ!!」

「ククッ、可愛い声で鳴くじゃないか！」

「あれだけ大見得を切っておいて、今さら懇願とはな！　無様すぎるぜ！」

ゴリュォオオオッ♡♡♡　ドゴッ♡　どぴゅどぴゅッ♡　ズゴゴゴゴゴゴッ♡♡♡

「ヒギィイイイイイイイイイッ!?♡♡♡♡♡」

冬吾が情けなく泣けば泣くほど、凌辱者たちは歓喜し興奮の坩堝と化す。

凄惨なレイプは際限なく苛烈さを増した。

「悪人に恐れられる名探偵が、淫汁垂れ流しの爆泣きブス顔で無様懇願とはなぁ！」

「ははははっ！　笑えるぜぇ！」

「あひひぃいいいいいいいいいいっっ!?♡♡♡♡♡♡」

白目を剥いた顔を乱暴にマラビンタされ、鼻腔にまでザーメンを注がれる。

（おーーーッ!?♡♡　ザー汁に溺れるッ！　全身ザーメンコーティングされて激くさザー臭取れなくなるぅうううううううッ!?　イヤァアアアアア

アッッ!!）

脳髄まで犯されている感覚に、冬吾は絶叫し続けた。

「ンォオオゞゞゞジッ♡♡♡　ひぃいいいいいっ!?　許しっ、もう許じでぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!　アへぁあああアアアアジッ♡♡♡♡♡」

（イヤイヤいやぁあああああああッッ!!）

「こんな猥褻汚物が許されるわけないだろ！」

「お前はレイプされるために生まれてきたんだよ！」

パンッパンッ♡　ズヂュンッ♡　ドヂュンッ♡　ヂュゴォオオオオッ♡♡♡　グブッッ♡♡♡

「ほごぉおおおおおっ!?♡♡♡　ゞゞッゞッ♡♡♡　雄っぱいもマンコももうらめぇえええぇぇぇぇっ♡♡♡　アーーーーッッ!?♡♡♡♡♡♡」

救いはない。それを徹底的に教え込む壮絶な凌辱。

「これまで色んな奴らをレイプしてきたが、この肉便器は格別だな！」

「まさに！　さすがは野田島様！」
「ああーーッ!?♡♡♡　おおおおおおっ♡　イグゥウウヴヴヴヴヴヴッ♡♡♡♡♡　おっおっおっおっ♡　イクイクイクイクッ♡♡♡　全身でアクメするッ♡♡♡　ずっとイグッ♡♡♡　許されざる悪質犯罪者どもにレイプ輪姦されでイグぉぁあああおおおおおおおおっっ!?♡♡♡♡♡♡」
恥辱と快楽による拷問は、いまだ終わりが見えない。

「グフフ、盛り上がってるねぇ」
小一時間ほど経った頃、優雅に鑑賞していた野田島が腰を上げた。ベッドに歩み寄ると、アヘ顔の冬吾にいやらしく笑う口を近づける。
「さて、そろそろいいかな？　君の過去……性的トラウマが聞きたいんだけど」
「オ～～～ッッ♡♡♡♡♡」

レイプされたままの尋問。部下たちは野田島の意図を汲んで、凌辱に緩急をつけた。

「こんなドスケベボディだ。さぞつらい経験をしたろう？」

「おほぉおおおおおおんっ!?♡♡♡♡♡」

（汚チンポ尋問やめでぇえええええええッッ!!）

「教えてくれよぉ」

「げひゅっ♡　んぼっ♡　おっおおおおおおおっ♡♡♡　だ、大学の時ぃいいいいいいっ」

たまらず、被虐のガチムチ探偵は答えた。それは記憶の奥底に封じた、つら過ぎる思い出。

冬吾が大学生の頃のこと。まだ人を疑うことを知らぬ初々しい彼は、強引に誘われたサークルで薬を盛られ犯された。

一度レイプされれば、あとはもう性奴隷として扱われるのみ。映像で脅さ

れ、在学中は延々と嬲られた。

そんな状況から脱したのは、卒業と同時だった。決死の思いで身一つで逃げ出し、まるで逃亡犯のように何度も名を変え拠点を変え、放浪の日々を送った。

トラウマに苛まれながらも、冬吾の心は折れていなかった。

強くなりたい、二度と被害者にならないために。そして自分を嬲った連中のような悪を、徹底的に潰す。それを心の支えにして、必死に己を鍛え、気づけば優秀で屈強な無類の名探偵となっていた。

下品な欲望を向けられても、自衛出来るようになった。磨き上げられた肉体は魅力を増したが、下衆どもは全員叩きのめしてきた。

冬吾の日常は、仕事と鍛錬に埋め尽くされている。娯楽らしい楽しみはない。悪を潰す瞬間が喜びだ。

凌辱の記憶から、男はもちろん女とも性的関係を持たずにきた。不能とい

うわけではないが、ひたすら自己処理で済ませ、それで不満も不自由もない。
冬吾は生まれ変わり、かつての過去に打ち勝ったのだ。
もう二度と、あんな目には遭わないと。そう信じて疑わず。
それが、今。
「あぁあぁあぁあっ!!　なのにっ、なのにレイプされでるづづづづづっ！　憎いクソどもにレイプ輪姦っ！　血の滲む努力で鍛えたガチムチボディをっ、激しく嬲られ犯されっ、尊厳踏み躙られて精神まで穢される壮絶凄惨レイプぅうううううううっ!?　ごんなのもうぃやだぁあぁあぁあっ!!
ヒギイイイイイイイイイッ!?♡♡♡♡♡」
（またぁあああッ!?　また汚チンポに負けるッ！　汚チンポ制裁に屈服するぅうううッ!!　あんなに努力じだのにぃぃぃぃぃぃッ！　レイプで全部ごわざれるッ!!　昔みたいに淫肉奴隷っ、犯されマンコのドスケベ肉便器になっぢゃうぅうううづづづづッッ!?）

脳裏には、過去の輪姦汚辱の日々が鮮明に甦る。かつてと同じく、いや、それ以上の凄惨恥辱と暴力快感に、冬吾の絶望は底なしに深まっていった。

「ククククッ。久々のレイプを、全身全霊で楽しんでくれてるねぇ。僕も嬉しいよ」

「ジオ〜〜〜〜〜ッッ!!♡♡♡♡♡♡　アヘッ♡　アヘッ♡　んひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃッッ!!♡♡♡♡♡♡」

「感謝しなさいねぇ？　君の本質はエロデカ雄っぱいにドスケベマンコだってこと、丁寧に思い出させてあげたんだから。僕らの優しさにお礼があってもいいんじゃない？」

「ノォオオオオオオオオオッッ!?♡♡♡♡♡　イヤーーーーッッ!!　いやぁぁぁぁぁぁぁぁっっ!!　んぐほおおおオオオオオオオッッ!!♡♡♡♡♡」

（もうやべでぇぇぇぇぇぇッ!!　許じでッ！　雄っぱいイヤイヤッ！　マ

ンコらめぇえええんッ!!　オオオオッ♡♡♡　許してッ、助けてッ！
汚チンポレイプやめてぇえええッ!!　ヒッギ～～～ジッッ!?♡♡♡♡♡）
憎き屑犯罪者に弄ばれて、ガチムチ探偵は白目を剥いて涙を散らし、淫肉と化した屈強ボディを激しく痙攣させる。
死を望むほどの恥辱。けれど決して助けは来ない。
「んっふ。しかしまったく、妻には大感謝だな。こんなにも素敵な肉便器をプレゼントしてくれたんだ。これから一層、彼女に尽くすよぉ」
「デデーーーーッッ!?♡♡♡♡♡　あおおおおおおっ!!♡♡♡　だじゅげっ、んぐぅううっ♡♡♡　オッオッオッオッ♡♡♡　ヒィイイイッ!?　誰がだじゅげでぇえええええええッ!!　グヒホオオオオオオオオオオッ!!♡♡♡♡♡　お～～～～～ッッ!?♡♡♡♡♡♡」

後日。

「これが……ンッ♡　ほ、報告書になりま、す……くぅっ♡　んぉおっ♡」

「まあ、これは……」

その日、事務所には依頼人が再訪していた。

不安げな人妻にファイルを差し出し、冬吾は調査結果を報告する。

「ォオッ♡　……そ、そこに書かれている通、り……ご主人は新事業立ち上げのため、ンホッ♡　お、奥様にも内密に動い、て……あひぃいっ♡」

「そうだったのですね……私ったら、なんて早とちりを……ああ、主人に申し訳ないわ」

もちろん、報告書に記されているのは真っ赤な嘘だ。野田島に都合のいい内容で、真実を追求し明らかにすることが信条の冬吾にとって、この上ない屈辱の虚偽。

そうとは知らない人妻は安堵したように微笑み、書類から顔を上げる。

「ふむぉおお……っ♡　オオッ♡　ほっ♡」
「あら、探偵さん。お顔が赤いわ。体も震えて……どうされました？」
「んくぅううっ♡　オッ♡　あ……ふ、不摂生が祟って、少々風邪、を……くほぉおおんっ♡」
「まあまあ、それはいけませんわ。ご不調の時にお手を煩わせてごめんなさい。これで失礼しますね」
「はっ、はひっ……ァアアアジッ♡」
ソファから腰を上げ、出口へ向かう彼女を震える体で見送る。
「本当に、ありがとうございました」
「ヒグッ……オッ、お、お気をつけ、て……っ」
扉が閉まり、足音が遠のいていく。それを確かめ、冬吾は慌ただしく鍵を閉めた。
次の瞬間。

ヴイイイイイイイイッ♡♡♡

「んっほぉおおおおおおおおおおっっ!?♡♡♡♡♡」

尻穴に埋められたディルドが、最大出力で震え出す。

たまらず絶叫し、冬吾は床に崩れ落ちた。

「ふふふ、どうやら妻は気づかなかったようだね」

隣の部屋から現れたのは、先の依頼人の夫。調査対象であり、冬吾を嬲り尽くした野田島だ。

「ひぐぅううううんっ♡♡♡　アアアアッ!?♡♡♡　止めてどめで振動どめでディルド抜いでぇえええええええっっ!!♡♡♡♡♡　グヒィイイイイイイッ!?♡♡♡♡♡♡」

「まあ、無理もないか。こんな強面の屈強巨漢探偵が、まさか尻に極大グロバイブをぶち込んでいるなんて……フフ、育ちのいい彼女には想像もつかないだろう」

野田島は悠然とした足取りで冬吾に近づくと、ムッチリ下半身のズボンを下ろし、ノーパン巨尻からイボ付き化け物ディルドを勢いよく引き抜いた。

ズロォオオオオオッ♡

「おひぃいいいぃぃいいいぃぃんッッ!!♡♡♡♡♡」

冬吾は絶頂し、尻を突き上げ上半身を床に倒す。

「さあ、お待ちかねの生チンポだよぉ」

ドヂュンッッ♡♡♡

「アッヘェエエエエエエエエエエッッ!?♡♡♡♡♡♡」

剥き出しのぽっかりアナルに、凌辱ペニスが突き立てられた。

「これからいいお付き合いをしようねぇ。ドスケベ肉便器の名探偵くん！」

ドチュドチュッ♡♡♡　ぱんっぱんっ♡　ズゴッ♡　ドゴッ♡　ゴリュンッ♡♡♡　ブヂュンッッ♡♡♡　ずっこずっこ♡　ごぢゅっ♡　バヂュッッ♡♡♡

「のっっほぉおおおおおおおおおおおおおッ!?♡♡♡♡♡　オオオオッ♡♡♡　汚チンポきったぁあああぁあぁあぁあッ！♡♡♡　クソ雑魚マンコにレイプチンポッ！♡♡♡　ヒギィッ!?♡♡♡　犯され便所にわからせ教育チンポぉおおおおおおッ！♡♡♡　イヤァアアアアアアアアアッ!!　無様アグメ強制されでイッッグゥヴヴヴヴヴヴヴッ♡♡♡♡♡♡　イヤイヤッ！　イヤーーーーーーッッ!!　い……オッッ!?♡♡♡　ドスケベ汚マンコ探偵にしないでぇえええええぇぇぇッ!!　ンオ〜〜〜〜〜〜ッッ!?♡♡♡♡♡♡♡♡」

ガチムチ名探偵に降り掛かった悲劇。

けれど、冬吾は諦めない。たとえどれほどの無様を晒し、汚辱の底に突き落とされても。悪を許さぬ正義の心は何度でも甦る。

それがさらなる凌辱を招こうと、最強を冠する男は必ず立ち上がるのだ。